TAMURA CITY / DOCUMENTARY RECORD

田村市
被災地復興企画展
トークセッション

帰還した小学校が目指した教育　～学校には地域がある～

2026 年 7 月 4 日
東日本大震災・原子力災害伝承館

田村市／田村市教育委員会

田村市被災地復興企画展『トークセッション』

日時　令和８年７月４日（土）13:30～
会場　東日本大震災・原子力災害伝承館研修室

【テーマ】帰還した小学校がめざした教育　～学校には地域がある～

【内　容】
避難指示区域（旧警戒区域）を学区にもつ学校としては、最初に再開した古道小学校の実情を綴った、震災・原子力災害に向き合った初めての教育実践記録である『未来をつくる小学生』を、著者がファシリテーターとなり、５名のパネラーとともに体験談を交えて意見交換を行い、都路の教育実践から伝えていくべき価値や魅力を探る。

【次　第】
１．開会
２．主催者あいさつ　　田村市長　白石　高司
３．来賓あいさつ　　衆議院議員　赤羽　一嘉　様
４．「帰還した小学校がめざした教育」の概要説明　著者　根内喜代重　氏
５．トークセッション
（１）登壇者紹介
①ファシリテーター
根内喜代重　氏（田村市教育委員、元旧古道小学校長）
②パネラー
関根　理子氏（ゆめか代表、元古道小学校・都路小学校教諭）
吉田　実里氏（福島大学在学、元古道小学校児童）
三浦　　覚氏（NPO 法人あぶくま山の暮らし研究所理事）
知本　康悟氏（元新潟県公立中学校長、全国地方教育史学会会員）
水谷　　大氏（田村市人材育成プロデューサー・元福島県公立小学校長）

ファシリテーター・パネラーのプロフィール

ファシリテーター

根内喜代重（こんない・きよしげ）氏

田村市教育委員、3.11 伝承ロード「ふくしま伝えびと」、JA 福島さくら監事。
2011 年の東日本大震災発生時には、田村市教育委員会主任指導主事として学校教育の正常化に向けて対応にあたる。
2014 年に旧古道小学校長として着任し、地元で再開した記録をまとめた「学校再開の軌跡～未来の礎に～」を発刊。
2024 年被災地都路町を舞台に震災後を生きる子どもたちと大人たちが織り成す共有の物語を描いた「未来をつくる小学生～震災が問いかけた都路の学校と地域～」を発刊し、2025 年に福島民報出版文化正賞受賞。

パネラー

関根理子（せきね・あやこ）氏

ゆめか代表、元旧古道小学校・都路小学校教諭。
2014 年旧古道小学校に赴任。2015～2018 年総合的な学習の時間を中心に地域の力を活かした特色ある教育活動を推進する。特に、「都路を活気と笑顔があふれる町にしよう」というテーマを掲げ、「都路キュウリマン」（キュウリジャム）の開発や都路のＰＲ活動を通して、本気で考える学びを実践する。2025 年に早期退職し、当時の子どもたちの思いをつなぐために「ゆめか」を立ち上げ、「都路キュウリマン」を製造販売する。

吉田実里（よした・みのり）氏

福島大学在学、元旧古道小学校児童。
2015 年「都路キュウリマン」（キュウリジャム）を誕生させた児童 15 名の一人であり、2017 年に都路小学校（統合校）となったため、旧古道小学校最後の卒業生でもある。安積高校在学中は、勉強と部活動（陸上部）を両立させながら充実した 3 年間を過ごした。大学では、経営学を専攻している。

三浦　覚（みうら・さとる）氏

NPO 法人あぶくま山の暮らし研究所理事、元国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所　震災復興・放射性物質研究拠点長、元東京大学大学院農学生命科学研究科特任准教授。
2013 年から田村市都路町できのこ原木林の放射能汚染対策の研究に従事。都路町での森林組合や住民との交流をきっかけに NPO 法人あぶくま山の暮らし研究所の設立メンバーの一人となる。現在は、都路の地で阿武隈地域の山の暮らしを 150 年先の世代に手渡したいと模索する。

知本康悟（ちもと・こうご）氏

元新潟県公立中学校校長、全国地方教育史学会会員。
35 年間、千葉県及び新潟県の主に中学校社会科の教師として勤める。最後の 6 年間を校長として島内の深浦小学校と羽茂中学校の閉校及び南佐渡中学校の開校の任に当たる。定年退職後、新潟大学大学院で地域教育史を学ぶ。著書に『村に育つ教育 ～佐渡の僻村が挑んだ「村を育てる学びの共同体」の創造』。

水谷　大（みずたに・ひろし）氏

田村市人材育成プロデューサー、元いわき市立小学校校長。
福島県いわき市を拠点に、長年小学校の教職員（校長）を務めながら、地域スポーツの振興や映画制作を通じた被災地の子どもの心のケア（PTG：心的外傷後成長）など、多岐にわたる分野でリーダーシップを発揮している教育者・スポーツ指導者。2008 年頃、県教委の職員として、南会津町を舞台にした映画『春色のスープ』（瀬木直樹監督）の制作・撮影現場に深く関わる。 2012 年に東日本大震災で被災したいわき市立豊間小学校の校長に着任。キャリア教育の一環として「子ども映画学校」を立ち上げ、本格的な映画制作プログラムを導入した。

（渡邉賢一副市長）　それでは皆さん、こんにちは。本日はご多用のところ田村市被災地復興企画展にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。本日司会進行を務めます、田村市副市長の渡邉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

ただいまから、今回の復興企画展のメインイベントである「トークセッション」を開催いたします。

はじめに主催者であります田村市長、白石高司よりご挨拶を申し上げます。

（白石高司市長）　皆さんこんにちは。このイベントを企画いたしまして、人が来なかったらどうしようかなという一抹の不安がありましたが、こうやってこの場に立たせていただいて、ほぼ満席の状態でございまして、主催者として本当に感激しております。ありがとうございます。

本日は「田村市被災地復興企画展」に本当にこんなに大勢の皆様においでいただいたことを心から感謝申し上げます。また、本企画展の開催にあたりましては、ご尽力をいただきました関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。さらに、ご多用のなかご臨席を賜りました、元国土交通大臣、赤羽先生を初め、多くの国関係者の皆様には震災後、田村市の復興と地域の発展に温かいご支援とご協力をいただいておりますことを、この場をお借りいたしまして、心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、本企画展は、被災地である田村市の復興の歩みを振り返るとともに、その経験と記憶を風化させることなく、後世へ伝えていくために開催するものでございます。とりわけ地域と学校の関わり合いは、復興を支える大きな力であり、子どもたちが地域の歩みを学び、地域の方々が学校を支えることで、未来へ繋がる絆が育まれてきました。災害からの復興は決して平たんな道のりではありませんでしたが、地域の皆様のたゆまぬ努力と、全国から寄せられた温かいご支援、そして多くの関係者の皆様のお力添えにより、田村市は着実に前へ進んでおります。その歩みを記録や映画として残し、様々な媒体を通して広く伝えていくことは、復興の記憶を次の世代へつなげていく大切な責務であると考えております。

ここからは、原稿にはございませんが、私はこの企画の中で一つ夢がございます。原作者の根内先生と、主役であります関根先生をアカデミー賞、レッドカーペットの上を歩かせてみたいなと。そういうことによって、人が育ち、そして我々がやっていることを多くの方々に知っていただき、当時の環境の中で、小さな小学生が、ちゃんと地元のことを考え、地元にあるものを生かして、そして先生のご指導をいただいて、子どもならではの発想で作ってこられたという。それがちゃんとした製品だった。私はこれが素晴らしい物語だというふうに思います。本日の企画展が、これまでの復興のありようを改めて見つめ直し、地域と学校がともに築いてきた絆を感じていただく機会となれ ば幸いでございます。結びになりますが、ご来場の皆様、そしてご臨席賜りましたご来賓の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。

（渡邉賢一副市長）　続きまして、ご来賓の方よりご挨拶を賜りたいと存じます。衆議院議員、赤羽一嘉様、よろしくお願いいたします。

（赤羽一嘉衆議院議員）　皆様こんにちは。高いところから失礼いたします。ご紹介に預かりました衆議院議員の赤羽一嘉でございます。私は当時、2012 年の 12 月 21 日に、自公政権、第二次安倍内閣の経済産業副大臣、そして原子力災害現地対策本部長を仰せつかりまして、約 2 年間、この被災地に足しげく

通わさせていただきました赤羽でございます。そして今なお、福島の復興に全力で頑張っております。
経済産業省ならびに復興庁の面々にもお会いできましたことに心から感謝申し上げます。いろいろありがとうございました。

私も実は、阪神淡路大震災に遭遇しまして、住まいを失った被災者でございました。当時は、時の政権と被災地の温度差が余りにもひどくて、私も失ってきた 1 人として大変な怒りを持って、こんな言語道断な政治はけしからんというような思いで政治活動をしておりまして、そのときに、この現地対策本部、重責を担うにあたりまして、あのとき私は被災者として悔しい思いをした、同じ思いを福島の人々にさせることがあってはならない。できるだけ現場に足を運んで寄り添う、頑張ろうと思って、1 月 2 日からですね、実はずっと入り続けてきたんですけど、ただ我々の思いとしては、被災者に寄り添うという気持ちでいたんですけど、 やっぱり自然災害と原子力災害の違いがあって、東京電力とはやっぱり加害者的な立場で、非常に難しい。寄り添いたいと言っても違うなと言われるような、そんな感じで。大変な思いをした被災者の皆さんの気持ちからすれば当然のことなんですけど、原発災害という未曾有の災害でふるさとを追われて先が見えない。もう本当に不安の中で、本当に寄り添うことの難しさっていうのを教えられながら、とにかく我々の任務としては線量を下げるということと、あとはインフラを整え、そして一日も早く、まず避難指示を解除するというのが最大の仕事でございました。

2012 年の 12 月ごろからずっと検討してきたんですけど、第 1 号で解除できたのが、この田村の都路でございましたが、それから、この都路の退避解除のための住民説明会ですとか、そうした仕事をさせてもらったという感じでございました。 本当に難しくて、避難指示解除できたけれどもなかなか風評被害が大きくて、そんなに簡単に皆さん安心して帰ってくる状況じゃない中で、当時の古道小学校を開放するということで大丈夫かなと思って心配してですね、たぶん入学式は随分マスコミが来るということで、前の日に相談させていただいて、状況も踏まえ根内校長先生と懇談させていただき、今回先生が作ったこの本のなかでも紹介していただいて、何かこう、こんなにも感謝されるようなこともあるのかと思うぐらいのことだったんですけど、当時は正直言って、やっぱり大変厳しい状況の中で、仕事から離れている人が多い中で、小学校の再開というのは先生たちも大変なご苦労だろうなと思っておりました。
当時はあまりわかってなかったんですけど、今回この本を全部読ませていただきまして、こんなことが起こっていたのかということで、大変勉強になりました。

私は公明党ですが、公明党としては、やっぱり子どもたちっていうのは日本の将来の宝ですから、日本の将来の子どもたち一人ひとりに平等に良質な教育を与えるのが、日本の将来を支えるためにも大事だという、我々の思いもございました。
そうしたことが実は、いろんな全国各地で、公立の教育というのは非常に難しい状況の中で、一番環境が厳しかったはずの古道小学校において、 地域の人がともに力を合わせてですね、自分たちのこの地域の未来を託したっていうことなのだろうなということがすごく、この本を読ませてもらって、あらためて認識したところです。
ここには、最初に本気かどうかっていう覚悟だっていうことが書かれていて、最後にやっぱり本気じゃないと、これが実現しないっていうところで結ばれていることがすごく印象に残りましたし、本気で関わった根内先生や関根先生たちが、この地域の人達と、これはまた一過性じゃなくて、一つのことをやり続

けたことが、福島民報社のグランプリを受賞したことが書かれておりますし、その過程で、小学生の皆さんがだんだん専門家になっていくんですよね。こだわりを持って、キュウリの形が残らないといけないとか。僕も家がパン屋だったので、そうだろうなと思ったんですけど、その固形物が残ってないとだめだっていう、こだわりがあるところとか。非常にプレゼンテーションもしっかりしていますね、こういう山間部の学校の出身だと、多分すごくハンディキャップがあるように思えて、何と言うのでしょうか、事実社会で、実学を学んだ力強さっていうのは、やっぱ本当の教育ってこういうことなんだろうなと思います。すごく多くの学びと、勇気をいただいたと思います。

本当にこれから教育というのは、全国各地域で、教育の質の向上が大変大きな課題だと思っていますし、私はやっぱり、もっと地域の人が支え、ともに関わりながら、おじいちゃんやおばあちゃんの知見を小学生たちが学んで、そこから自分のなかで眠っている才能を開花させていくっていうことが本来の、教育であるのじゃないかと思います。

学校の教室だけじゃなく、僕は、本当は半日ぐらい、そうしたフィールドワークみたいなことの方がいいんじゃないかなと思っていますけど、なかなかそう簡単じゃない。こうした実例がこの都路の小学校の中で、現実に展開していくということは、我々やそれぞれの立場で大いに宣伝して、一緒になってですね、日本の教育が新しく輝けるような、そうした会合になれば、本当にすばらしいなと思って楽しみにしてきました。

我々も立場がそれぞれ変わりましたけれども、引き続きこの福島の復興は我が信条の一丁目一番地であります。私はやっぱり一番苦労した地域の方が一番幸せになる権利があるという、そういう思いで、実は福島イノベーションコースト構想も、今日一緒に来た方々と作らせていただきました。

この未曾有の原子力災害で、大変なご苦労をされた福島の皆さんにいろいろ希望のプロジェクト業務とか、この福島の浜通りをはじめ被災地の皆さんが、地域に誇りを持てるような、そうしたプロジェクトということで、福島イノベーションコースト構想だけじゃなく、本気になる人が 1 人でもいればできる、そういう思いで、皆さんにご奮闘いただき、私たちも共に戦わせてもらいますことを約束申し上げまして、感謝のご挨拶とさせていただきたいと思います。 どうもありがとうございました。

（渡邉賢一副市長） どうもありがとうございました。それでは、トークセッションに入る前に、この「未来をつくる小学生」の著者であります、根内喜代重様より「帰還した小学校が目指した教育」の概要について、ご説明をいただきます。よろしくお願いいたします。

（根内喜代重氏） 皆さん、こんにちは。今日は本当にありがとうございます。本当に日頃からお世話になっている方々に、こんなにも来ていただいてありがとうございました。ただいまの赤羽先生からも、本当に、書いた私以上に何かいろいろとお話いただいて今感激しているところです。本当にありがとうございます。それでは早速ですけども、帰還した小学校がどのような教育を目指すのか、そういったことをお話させていただきたいと思います。

震災から 15 年ということでございます。今回の舞台となります古道小学校、現在の都路小学校ですが、原発事故がありました福島第一原子力発電所から約 21 ㎞の地点にございます。学校が校舎に戻ってから 12 年が過ぎました。震災は学校や地域に何を問いかけたのでしょうか。学校が再開したとき、子どもた

ちはどのような思い出この日を迎えたのでしょうか。 この「未来をつくる小学生」は原発災害と向き合った初めての教育実践記録です。これからの学校や地域を考える、一つのきっかけになっていただければと思います。

2011 年 3 月 11 日、この日から私たちの生活は全く変わってしまいました。消えることのない記憶。このことは今でもはっきり覚えている。「私も大好きな弁当の日」。これを書いてくれたのは震災当時、小学校 1 年生だった、5 年生です。4 年という月日が過ぎても子どもたちの中には、あの日のことがはっきりと記憶されていました。

当時、都路町には「古道」と「岩井沢」、二つの小学校がありました。これからどうなるのだろう。子どもたちも保護者、地域の方も誰もが同じ思いでした。

コンクリートの床にブルーシートと毛布。寒さと虚しさが芯から沁みてきました。廃校となっていた春山小学校校舎には小中学生 13 名を含む 384 名が避難していました。子どもたちの勉強する場所が欲しいとお願いしました。どこにそんな場所があるのだ、こんなときに勉強ができるのか。そういった点を指摘される方もおりましたが、その時には当然のことだと思います。それでもお話をしていく中で、スペースを空け、机を運んでくれて、避難所に特別な教室ができました。子どもたちは、次の日学校に行きますと、ちょっと誇らしげな顔をして椅子に座っていました。

プリントを渡すと、夢中になって勉強しました。 当時の教育長が話していた、「子どもは学ぶことで安定する」、その姿が確かにありました。その年の 4 月から仮校舎での学びが始まりました。1 時間もスクールバスに揺られて帰る子どももいましたが、それでも二つの学校が一つになり、みんなで学べることが楽しかったのです。避難先での生活、いろいろなことが頭の中に浮かんだり聞いたりして、辛いことがいっぱいあります。保護者の皆さんそれぞれに、人には言えない、言わないご苦労が様々だと思います。それでも子どもたちから元気と勇気をもらい、子どもたちのために頑張り通したのだと思います。

震災前から古道小学校に勤務していた先生の言葉です。「勉強する場所ができてよかった。子どもたちはいつもどこか落ち着かない雰囲気があった。それを感じるたびに都路の校舎に戻って学ぶ姿が見たいと思う。」そう話しています。

平成 26 年 4 月に学校が再開しました。「おかえりなさい」の横断幕を掲げた多くの地域の皆さんが出迎えてくれました。入学式には市長をはじめ、市の要職にある方全員が出席して、歴代 PTA 会長からは、紅白饅頭までいただき、地域挙げての盛大な歓迎でありました。そこに込められた願い、期待がずっしりと伝わってきました。

4 年ぶりの運動会はたくさんの地域の皆さんが来てくれました。誰もが参加できる種目も考え、地域のきずなを深めることができました。学校が始まって 3 か月が過ぎたころ、教頭先生が「去年よりも休む子が少なくなりました、体も締まってきました。」そう話してくれました。学校再開時に、肥満傾向にあった 17 名の児童のうち 15 名に改善が見られました。

これは、七夕の短冊です。将来はプロサッカー選手になりたいなど、将来の夢や今度頑張ることなどを書くことが多い中、家族が幸せでありますように、ずっと健康で楽しく暮らせますように…。

こういった短冊がとても多かったことが印象に残っています。先生たちは、子どもに力をつけ、ときめくような学びをするために、地域に内在する教育的価値を生かそうとしました。そのためには、まず自分たちが地域を知ろう、夏休みに都路ツアーを行いました。 教育実践の一つが野菜づくりです。一般的に

は、ここで野菜を作るのは無理でしょう、作ったってどうせ食べられないでしょう。それが普通でした。
そういった中、放射線量を図り、必要な土を入れ替え、学びの場を作りました。無理か無理でないか、食べられるか食べられないか。そういうことを含め、子どもたち自身が確かめ、考えていく教育がこれからは必要ではないか。子どもたちは、地域の先生の力をお借りしながら、目を輝かせて活動しました。

それだけに収穫の喜びが大きく、しかもそれを地域の皆さんと分かち合える充実感を得ることができました。地域の人達を招き、「感謝の会」を開きました。下の写真は案山子を作り、文化祭で出展し、金賞を取りました。
学校の近くにもう一つの教室ができます。「よりあい処 華」です。華の先生方からあるとき「校長先生、勉強してないとだめですか」とたずねられました。聞くところによると、子どもたちがここで勉強したいと話していたそうです。その日から子どもたちは勉強道具をもって、たびたび「華」を訪れました。たくさんの地域の先生がいるからです。そこには、世代を超えた微笑ましい交流があり、人が育つための、学校だけではできない学びがありました。
伝統の和太鼓も復活しました。5 年ぶりに鳴り響いた子どもの太鼓が、地域に未来があることを感じさせました。敬老会では、盛大な拍手が鳴りやまず、涙を流す人も数多くありました。6 年生は地域に出かけ、地域で頑張る人たちの声を聞き、理想のまちづくりを考えました。その勉強を通して、自分たちも地域の一員であり、地域の人に支えられていることを感じ取ってきました。

それぞれの学年がそれぞれに、本気になって学ぶ、そういう実践をする中で、当時の先生が「キュウリジャム」を誕生させました。
それは、保護者参観が行われた 7 月 7 日の七夕の日で、この日を後に「都路キュウリマン」と命名される製品の誕生日としました。商品化し、活気と笑顔溢れるまちにしようと、皆さんの協力を得ながら、本気の学びがますます高まっていきました。キュウリ音頭を作詞作曲し、キャラクターを作り、着ぐるみを作り、ラベルのデザインも自分たちで作りました。
いつしか夢は目標になっていきます。しかし、商品化するとなれば、子どもが作ったジャムだからと許されるものではありません。専門家からは厳しい指摘を受け、落ち込み、 挫折しそうにもなりました。それ以上の多くの応援をいただきながら、ついに本格的な瓶詰を完成させることができました。
報道各社の応援もありました。県内の様々なイベントに出かけ、地域のよさを発信するパンフレットを作り、修学旅行などを利用して全国へ発信しました。子どもたちは、いつしか地域にはなくてはならない存在になっていきます。

令和 2 年。都路キュウリマン 3 代目となる 6 年生が、第 1 回小学生まちづくり大賞でグランプリを受賞しました。この子どもたちは、学校が再開した時に入学した子どもたちです。しかも、これまでの活動は教育的な価値としても認められ、家庭科の教科書にも掲載されました。学校は、都路にあるものを生かす教育とともに、都路にはないものからの学びも進めました。
その根底には、地方の中山間地、原発災害地にあることで、学びに不利益を被るようであってはいけない、という強い思いがありました。
これは大掛かりな科学実験を目の当たりにする子どもたちです。首都圏に行きながら、ここに来てもらおう。 何度もお願いをして実現しました。

子どもたちの知的好奇心が高まってきました。本物に出会う機会も作りました。様々なコンサートや、オーケストラ、そのために復興支援事業など、積極的に活用しました。学校にミュージカルがやってくる。見るだけではもったいない、表現力を養うチャンスだ。何度も断られながらも、粘り強くお願いし、数か月に及ぶワークショップと自己練習をやって、当日は 4 年生から 6 年生がミュージカルに参加させていただきました。

その翌年ジョージアでは、洪水による大被害がありました。子どもたちは支援プロジェクトチームを作り、応援メッセージと千羽鶴を作って届けました。悲しい出来事ではありましたが、子どもたちは、世界はつながっているという実体験をしたように思います。

実は 100 年以上前に、先輩たちは同じような行動をしていました。これは関東大震災のときの状況です。この時に、古道小の子どもたちは、全校生でイナゴとりをして、それを売ったわずかなお金を東京へ送ってきたわけです。時代を超えて、これはつながっており私たちの誇りでもあります。

世界を知ることは、自分を知ること。世界で活躍している皆さんにも事業をしていただきました。このうち、青年海外協力隊などで活動していた東郷さんは、調べて理解するだけでなく、自分で見たり、感じたり考えたりすることを大切にして欲しいと子どもたちに伝えました。

このような学びは、たくさんの皆様の応援があってこそのものです。様々な団体や関係機関の方からもたくさんの応援をいただきました。もちろん、地域の皆さんにもお世話になりました。地域の皆さんもまた、学校や子どもたちと関わることで、誰もがそれぞれの原発災害と向き合いながら、何かを乗り越えようとしていたように思います。

これは、ある地域の方からの寄稿です。「どれほど学校の再開を待ち望んでいたか、久しぶりの子どもたちの登校風景に感激して、涙が出そうになってうれしかった。」

あらためて、子どもは地域の宝であると思います。月日が過ぎ、あるお母さんからの寄稿です。「本当は別の小学校へ転校させようと思ったのですが、どうしても古道小学校がいいというので、古道に通わせることにしました。」毎日片道 1 時間かけて通う子どもたち、通わせる保護者の皆さん。頑張りと苦労がずしんと伝わってきます。

学校が再開した時。学校が戻っても、3 分の 2 の子どもたちは学区外から通学していました。それが 12 月になったときに、半分までの子どもたちが地元から通うようになりました。学校が再開したとき、「66 名の子どもたちが明日、この学校に来てくれるだろう。そういう思いを毎日持ちながら、学校教員生活を送ったのはこのときが初めてですよ。」元の校舎に戻ったときの先生たちの思いです。

「ここは自分たちの学校で特別だよね、そこで学ぶ子どもたちの姿が見られてよかった。保護者や地域の皆さんもとても協力してくれて、こっちに戻ってきて本当によかったです。子どもたちが都路という、自分の地域で学ぶことのすばらしさを感じます。やっと古道小学校の先生になったと、心から感じることができた。」この先生は震災の時に、福島県の教員に採用されました。その時迎えてくれる学校も地域もありませんでした。

先生たちは誰もが強い学校愛を感じていました。だから頑張ることもできました。学校には地域がある。地域には奮起できる人たちが、学校は子どもたちと本気でいる人たちをつなぐ人として生きる力をつけようとしたのです。

子どもたちは中学校でも活躍し、多くの人たちに元気を与えてくれました。

都路キュウリマンを開発した子どもたちが高校生になって、交流会を持ちました。そして一人ひとりがしっかりと夢を語ってくれました。その話を聞きながら、目指した教育は間違ってはいなかったという喜びとともに感動しました。この子たちが 20 歳になった時に、この本の出版記念会を開きました。この時も、これからの都路を考えよう、そういうトークセッションを行いました。担任の関根先生は、教員途中で退職して、「都路キュウリマン」を復活させました。その思いは、この後のトークセッションでもぜひ聞いてみたいなと思っているところです。

子どもは地域の未来そのものです。どこの地域にも、それぞれに課題はあると思いますが、どこの地域でも輝くことを心から願っています。ご清聴いただきありがとうございました。どうもありがとうございました。

（渡邉賢一副市長） それでは、トークセッションの準備をいたしますので、しばらくお待ちいただきたいと思います。…準備が整いましたので、これよりトークセッションを始めさせていただきます。

はじめに、 ファシリテーターおよびパネラーのご紹介をさせていただきます。なおプロフィールにつきましては、お配りした次第の裏面に掲載してありますので、お名前のみの紹介とさせていただきます。

まず、ファシリテーターの根内喜代重様。

パネラーの 1 人目、関根理子様。

続いて、吉田実里様、三浦悟様、知本康悟様、最後に水谷大様でございます。

ご登壇の皆様には、それぞれのご経験とご見識をもとに、大変貴重なお話をいただけるものと思いますので、期待してお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（根内喜代重氏） それでは、こんにちは。今日は本当に貴重な時間ですので、早速始めさせていただきたいと思います。

まず、3 名のパネラーの皆さんに、本をお読みになった感想、特にこの教育実践がもつ意義や魅力の部分について、初めに伺いたいと思います。それでは早速ですが初めに三浦先生からお願いいたします。

（三浦悟氏） 三浦です。お願いします。私は 2013 年 11 月に初めて都路に来ました。12 年半ほどになります。この本を読んだのは、昨年の 6 月でした。今思い出すんですけども。12 年半通ううちに、気がつかずに私、実は山の研究をしていました。そういうことをしながら、「よりあい処 華」さんに行ったり、あるいはペーパーにまとめていただいたり、そんなことをしながらやっていた。そのときに、小学校でこういうことがあったのかなっていうことを読みながら…50 ページあたりがそういう状態です。

なぜここまでこう深く共感したのかっていうのを振り返ったときに、やはり先ほどのお話にもあったんですけれども。すべての教科に埋め込まれていたといいますか、小学生たちが動き出したことはもちろんなんですけれども、その本気を出した根内先生をはじめ、関根先生や指導された先生方、そしてこの地域の先生方、あるいはそのきゅうりのジャムを作った後に、販売するまでに関わった方が、皆さんがその本気だったという、やはりそれがすべてだと思います。

これはドキュメンタリーなので、非常に丁寧な事実認定に基づいて、私も研究者なので、原発事故後の様々な広報的な記録とかも見てまいりましたけども、とても丁寧に書き起こされていて、その一つひとつのもとに、地域の方々、子どもたちみんなが本気になったということを感じ取ることができます。この小

さな学校でも、その子どもと地域の人と、そしてそれを先生が、その本気の関係が現れたときに、これだけのことが成し遂げられるのだということを思いました。この中のアンケートにその子どもたちが、地域の 人々に喜んでもらいたい、というふうなことがとても印象に残っております。そういう気持ちを持ったいわゆるこの子どもたち、地域の人、そして先生方、その本気がもうすべてだったのかなと思います。この本は 1 年に 1 度は読み返したいものだなと思いました。以上です。

（根内喜代重氏） ありがとうございます、続いて知本先生からお願いいたします。

（知本康悟氏） 皆さんこんにちは、知本です。今日は新潟から参りました。資料を 1 枚お手元に用意させていただいています。これは日本農業新聞に書かせていただいたものです。この社長が私と根内先生をつなぎ、そして、私とこの場を繋いでくれたというわけです。

根内先生からお手紙をいただきました。そこに、自分が伝えたかった思いをすべて汲み取っていただいたように感じながら…。と書かれていました。私も返事の中で、書評を書くのに多くの時間を要しませんでしたとお返ししました。根内先生が言った地域と学校の物語っていうのは、実は私自身の物語でもあったわけです。どういうことかと言いますと、私は教員生活の最後の 6 年間を、ふるさとの佐渡で務めました。そこで小中 2 校の閉校と。当時初めてだったんですけれども、市町村をまたいだ中学校 1 校の開校になりました。

その中で問われ続けたことがあります。それは、地域にとって学校とは何かということです。変貌の大きさと、それから喪失の深さは比べようがありません。しかしながら、今、過疎化の波に洗われてですね、閉校に直面している、多くの地域とこの実践は重なっていきます。その意味でも、私と根内先生は同じ問いの中、いうことだと思っています。その中で、子どもを真ん中に置いて、地域で人と自然、人と人が結び直してですね、ともに生きる場をどうつくり出していくのが、その答えがこの「未来をつくる小学生」になったという具合に思っています。

私はもう二つの意味で大きな価値のある実践だったというふうに考えています。一つはですね、根内先生の説明があったわけですけれども、それまで地域に合った、自然と共生する農業に価値を見い出し、原発の、放射能に汚染された、その力。命を育む、そしてトリガーという部分、学びの学びを生む農業学習に取り組んだということだと思います。

それこそ、先ほどもお話がありましたけれども、本気と覚悟を持った地域の人々にとってですね、あらためて地域のよさとか、その地域らしさを取り戻して、そこにいる喜びを見いだす。そういう学びやすさという具合に思います。

先ほどの根内先生の説明の中でも、多様な学びが紹介されたと思うのですけれども、本当にグローカルな子どもたちを育てる実践でもあったというふうに思っています。ここでグローカルっていうのは、地球的、世界的な課題を地域に立って考え、そこで解決しようとする。そういう考えになります。典型的なグローカルな子どもたちを育てる実践になると思っています。

もう一つは、そこに折り重なるようにして、本気で関わる、様々な地域の先生たちがいたということですので、そこに新たな、先ほどの根内先生のお言葉をお借りすれば、学びの場ができましたし、もう一つの教室ができていたわけです。それを私なりの言い方をさせていただけば、学校と地域が学び合い、育ち合う学びの共同体というものが、 そこに伝えてきたという具合に考えています。

大きくちょっと話を広げてみると 1960 年代以降ですね、地域共同体が衰退していくわけですよね。その中で、村では昔から、1 人の一人前の子どもを育てるっていう人間形成の、その力というものもあったわけです。それも失われてしまったわけですよね。その結果、子育てが核家族の中に閉じ込められてしまい、いわゆる孤立した、育てるという意味での子育ての時代が今も続いてきていると思います。

確かに私たちは、私自身もそうですけれども、地域のしがらみに対応してきたわけですよね。しかしながら、それに変わりうる人間形成のための新しい共同体っていうものを、地域にどうするのかっていう課題に対する答えは、今までなかったわけですね。なかったという意識がありますけれども、やはりそこのところは、これが課題であったと、いうことだと思います。

根内先生を中心とするこの実践は、そこへ大きなヒントを与えてくれる実践があったという具合に思います。現在ばかりでなくて、これから先の学校と地域の教育のあり方に対する、一つの希望としての実践であったというふうに考えています。以上です。

（根内喜代重氏）　ありがとうございます、つづいて水谷先生お願いします。

（水谷大氏）　はじめまして、水谷大と申します。私は 38 年間学校の教職員をして、退職してすぐに映画制作会社に勤めさせていただきまして、なぜそんな経緯だったかというと、ここにもいらっしゃるんですけど、福島イノベーションコースト構想機構の伊藤様が、私が福島県庁に務めさせていただいたときに、課長、上司ですね、県内をかけ抜け、映画を制作するという事業を経験いたしました。そのあと映画制作会社に入ってからは、川内村さんや都路町さんに入り、ドキュメンタリーを作らせていただきました。福島県の人たちのドキュメンタリーで皆さんに知ってもらいたいのは、それは都路さんだけじゃなくて、私はいわき市出身ですけれども、同じように被災しております。特にいわき市の場合は、津波の被害がございまして、多くの家屋が同じように、根内先生が説明されたように流されて、1 年間、別の学校を回るような経験をしております。

私がこの本を読んで感銘を受けたというか、共感した部分と、本当にそうなのかなって疑問に思ったのと、両面ございまして。

共感する部分はやはり先ほど赤羽先生が最後におっしゃられたことや、今、私の左側にいらっしゃる三浦先生や知本先生も同じようにおっしゃられた、その覚悟と、大人の本気っていう部分がこの中に凝縮されています。またその凝縮された部分は、字面を見ればわかるのですけれども。たぶん、根内先生が書けなかった部分、行間の部分というか、あるいはなかったかもしれない部分っていうところに僕は非常 に興味を持っていて、校長として自分の願いや思いを同様に伝えて、人を引きつけて、焚き付けることは良くないかもしれないですね。アジテーションして、みんなと一緒に目標に向かうっていうそういう分野、活動というのは、どうやってもらっているかというのは書かれていないので、そこに非常に興味を持っています。おそらく根内先生は「ER」と「OR」の人かなと、僕は直感的に思ったのです が、今日もあそこにファシリテーターであるという、働き過ぎていますが…、この学校を動かすプロデューサーだったわけですよね、コーディネーターだったかもしれません。地域の子どもと一緒。あるいはディレクターが欲しい。すべて「ER」と「OR」がつく職業です。それを全部 1 人で。そんなふうに直感的に思いました。

あと共感した部分は、すずらん農園のくだりがありましたよね。この畑は本当に作物つくっていいのか、悪いのか。放射線量が 0.23 マイクロシーベルトを超えていれば、屋外で活動しません。通常であれ

ば、マスクをします、放射線を避けるためジャンパーを着ます。屋内に入るときは、ジャンパーをはらって中に入ります。

私も校長時代に同じような経験をしまして。0.23 マイクロシーベルト以下でなければ活動しちゃいけないっていう中ですけど、いわき市は一斉にプール開きをやりましょうって号令がかかりました。そう言われたなかで、うちのプールだけ整数値でしたので言いました。「僕は子どもたちの命を守る責任があります、できません」と。そうしたらこう言われました。「それを考えるのがね、校長先生のお仕事なんですよ。」と。もう少し早く根内先生に出会っていれば、決断できたんですけど、無理か無理じゃないか、やってみるところから考えようっていうところからスタートしてみました。

プールサイドに厚さ 6 ミリの鉄板を敷いてみたんです。そして、ガイガーカウンターをあてたところ、5 マイクロシーベルトあったのが 3 分の 2 まで下がった、おやおやと思い、もう 1 枚、 6 ミリの鉄板を敷いて合わせて 12 ミリになりました、さらにカウンターをあてると、3 分の 1 までに減ったのです。いよいよ整数値を下回りそうです。三枚目を敷き、厚さ 18 ミリになりまし た。カウンターは 0 を示しました。あれほどあった放射線量が三枚の鉄板を敷いたことで、シャットアウトできたんです。

前日まで僕は、国が作ってくださった放射線の除染マニュアルを全部読んで、 高圧洗浄機を使って、お月さまが出るまで教頭と教務主任の 3 人でずっと、毎日子どもたちがプールに入った後洗浄していました。お月さまを見ながら、 でもつまらなかったです…。あと 3 分ですね、はい。じゃあ、続きはまたあとで。

（根内喜代重氏） あと 1 時間ぐらいですが、ただいま、本やそれぞれの経験から、教育システムの推移などについてお話をいただきました。ここで当事者の皆さんにもちょっとお話を伺いたいと思います。

まず関根先生、当時校長はじめ同僚が毎年転出していて、教え子も卒業し、そういう中で、これをずっと続けていくっていう、そういう原動力になったものは何なのかなって。そのあたりをちょっとお聞かせいただければと思います。

（関根理子氏） 閉校が発表されたのは新聞で、突然秋頃に「閉校」の文字があって、私たちも子どもたちも驚いて、5 年生の途中でしたが、そこから閉校に向かって最後の卒業生になるっていうことにショックを受けて、でも最後はすばらしい年にしようっていうことで、頑張ってきた「都路キュウリマン」の活動だったんですけど。

本当に閉校、卒業式、閉校式、そして子どもたちが出ていってしまう。根内先生も出ていってしまう。

そして震災以降、旧石森小から子どもたちを見守ってくださった、今日、その先生方がたくさんいらっしゃいますが、尽力してくださった先生方もほぼいなくなってしまい、本当に寂しかったのを今でも覚えています。とても心細くて、いや、もうどうなっちゃうかな、しかも 4 月 1 日から新しい学校になるものですから。すごく戸惑いがあったんですが、子どもたちがやはり活動の大きさ、すばらしさ、その本気の度合いがやっぱり普通ではなかったものですから。

そして、二つ下の子ども、後輩達へ僕らの活動を引き継いで欲しいという願いを持って、プレゼンまで、4 年生の教室に押しかけて、何とかつないでくださいっていう思いを託したんですね。喜んで託されてくれましたが、その子どもたちも卒業していく子たちの願いを、ただ置いただけはつないでいけないので、私が何とかこの子たちの願いをかなえるために頑張らなくちゃという思いで、たった 1 人でも立ち向か

わなきゃという思いを持って活動を続ける、そこが子どもたちとの約束っていうところが一番の原動力だったかなと思います。

実はあとはもう一つありまして、本の中にもありましたが、私自身はとても楽しかったですから、私自身、根内先生が書かれていた「ときめく学び」っていうものを、教師としても子どもと一緒に体験していた。だからこそ、この活動は続けるべき意味がある。楽しいものだということを体感しているので、止めたくなかったっていうところも実はあったりします。以上です。ありがとうございます。

（根内喜代重氏）　ありがとうございました。実里さん、関根先生のお話を聞きながら、当時のことがいろいろ思い浮かんできたのではないかなというふうに思います。活動を通して、心に残っていること、それから役に立っているなっていうようなこともあれば、併せてお話しください。

（吉田実里氏）　ありがとうございます。振り返ってそして当時から時間が経って、今すごく考えることとしては、とにかくたくさんの人が、私たち子どもに見える形でもそうだし、見えないところでもたくさん動いてくれていたのだなっていうのを、すごく感謝の気持ちでいっぱいです。

当時、自分たちとしては、正直ここまで大きな活動になると思っていなかったですし、自分たちの下の子たちに引き継げるっていうことすらもう、そこまでは考えずに、自分たちの純粋な楽しいとか、やりたい、そういう気持ちで活動していたので、こんなに大きなプロジェクトになっていること、まず嬉しいですし、あとは、自分の保護者であったりとか、関根先生をはじめ、たくさんの先生方であったり、自分たちを愛する地域の人たち、あとは私たちのことを全く知らない、見ず知らずの人でも、少しでも興味を持ったらそれで、その思い、感動して動いてくれた人がたくさんいるっていうことが、どれだけ大きなことだったのかなっていうのを、今になってすごく体感しています。

なので、本当に自分たちの、ただやりたい、頑張りたいって思いだけでは成り立たなかったと思っているので、すごくたくさんの人に感謝しています。あと「都路キュウリマン」活動を通して、そこから時間が経って、高校生や大学生になってみてもすごく、学びになったというか、身に付いたなっていうことは、すごく大きなこととして一つあるのが、「できる」とか「できない」を先に決め付けるのではなくて、まずは行動してみる、やってみるっていう気持ちがすごく大切なのだなっていうことを学びました。

今はインターネットやAIが発達しているので、答えを検索して出そうと思えばたぶん、すぐに見つかってしまうし、 すぐ答えが出ることが多いと思うんですけど、そこを判断基準にするではなくて、何か自分の素直な好奇心や、頑張りたいっていうそういう思いとかを先行して、まずは何事もこうチャレンジしてみるみたいなところは、「都路キュウリマン」の活動全体を通して、それが今にすごく生きているのかなと思います。以上です。

（根内喜代重氏）　自分についた力と言いますかね、まずやってみるとかそういうお話もありました。

関根先生の例ですが、今の皆さんのお話を聞きながら、当時の子どもたちの学びのようすとか、こういう活動をすることで、こんなに変わってきたかっていうのがもしありましたら、ちょっとお話を聞かせてください。

（関根理子氏）　皆さん、聞いてわかると思うんですが、本当に素直で、そこに私もなんですけど、いい子たちばっかりなんですよね。言われたことは本当に一生懸命、丁寧にやる子どもたちが多く、本当にすばらしい子どもたちを育てる地域ではあるんですが、言われたらやる。

でも、この「都路キュウリマン」の活動を二年間やりましたら、言われないでもやるようになったのが大きな変化かなと思います。自分たちがやりたいからやってみるとか。一人ひとりの力を、小さな力かもしれないけど、それぞれの得意なところをお互いに認め合いながら生かして、このことを本当にしっかりわかっていて、そこを上手に生かして一つの大きな活動を作り上げていったっていうところが、その二年間の学びの中で変わったのではないかな、ただ与えられるのみではなく、自分たちから動くっていうことができることになり、その後の選択を見ていても、大きく社会に羽ばたいているなと。

高校進学は、私はここから通うので、船引高校にしか行けないんです、というのが、親の経済負担もあると思うのですが、それが都路では当たり前だったようなんですね。ところが、この子たちからはもうみんな好き勝手にどこにでも行っちゃいまして、郡山の寮で暮らした子もいましたし、お父さんお母さんは大変なんですが、毎朝送り迎えをして、通学させるっていうのが、普通にあったように思います。そういうところでも、子どもたちの学びが変わったことによる地域の変化っていうのがあったような気がして、本当にすばらしい子どもたちを私はいただきました。マイクをお返しします。

（根内喜代重氏）　まずやっている、自分からっていうのが、先生と子どもに共通している部分もあったかと思います。ちょっと関根先生の今のお話に付け足しさせていただきまして、今思い出したんですが、この子どもたち 15 人いたんですよ。それで中学校に行って、中学校から卒業して高校に行く時に、当時の校長先生に、進路状況をちょっとこう聞いたら、その当時、こんな話をしていたんですよ。

この 15 人の子どもたちは、それぞれいろんなとこに行って、だいたい中学 3 年生とは、友達の誰かが行くからここの高校に行こう。そういう言葉がこの 15 人には全くなかったっていう。みんなそれぞれが自分でやりたいところに行きたいところに行ったっていう、その話を何か思い出しました。本当にありがとうございます。

ちょっとこちらに、先ほど紹介した写真があります。ある意味、この学校再開のやっぱり象徴的な 1 枚かなと思っているとこなんですが。それで、実はここのところに、もう校舎に入ると懐かしいにおいがしましたって、これを書いてくれた当時の 6 年生が武田隼君です。そして武田隼君、実は去年大学を卒業して今、相馬市内で中学校の教員をやっています。当時の思いとか、また、あらためて教師になって何か感じていることを、ちょっとここで話していただきたいと思います。

（武田隼氏）　今、紹介いただきました、武田隼と申します。当時のことを振り返りますと、このすずらん坂を上ったときの記憶がすごくあって、あんまり比べちゃいけないことだと思いますが、避難先の石森小学校に行った時には感じなかった地域の温かさを、このすずらん坂を上ったときに感じた記憶があります。

校舎の中に入ると、やっぱり都路町は木、自然に囲まれているので、そんな中で育ってきたので、校舎の中に入ったらすごく木の香りがしたんですよ。懐かしいなって思った記憶が今でも残っています。

昨年度から教員になって、当時の先生方は本当に大変だったのだっていうのはすごく伝わります。今、

本当に周りの先輩方に助けられて働いているので。仕事だけでいっぱいいっぱいなんですけど、学校も移り変わって、先生のプライベート、学校が移り変わるってことは、やっぱ先生の自宅からも距離が遠くて、先生のプライベートも大変だったと思いますし、何より環境が変わって、教育するっていうのも大変だったと思います。

なので、今本当にこの立場になって、先生方にも感謝していますし、すずらん坂で迎えてくださった保護者の皆様、地域の方々には、学校再開の制度としてすごくいいスタートをしていたのだなという思いがありますね。こんな感じで大丈夫ですか。

（根内喜代重氏） こんなに立派になって。実はここで、地域の皆さんが迎えてくれたわけですけども、この地域の皆さんにとって、子どもたちはどのような存在なのかなっていうふうに思います。

実は先ほど、和太鼓の復活っていうお話をさせてもらったんですが、会長は曲を作って復活させてくれて、今も指導されている、坪倉新治さんが来てらっしゃると思うのですが。学校や子どもたちの存在、そういうところや、思うところもちょっとお話いただければと。

（坪倉新治氏） ご紹介いただきました坪倉と申します。よろしくお願いします。

敬老会に向けて練習していたわけですけれども、当時、行政局長だった松本さんっていう局長が、どうも運動不足で、体重がかなり増えている子どももいるから、何とか楽曲にもそういうところを、ちょっと入れたらいいじゃないのとかっていうことがありまして、それで、すごい激しく作ったんですよ。ダラダラ汗が出るぐらいの激しい曲だったんですけれども、それであの当時、叩いていてもゴールを最後どうやって終わるかわかんないぐらいに拡大して、最後、終われるかなあということで福田先生もいらっしゃいましたけど、終わりかなと思ってみんな後ろで心配していた記憶があります。

もう子どもたちは非常に楽しんでやってくれて、なかなか発表の機会がなく、当時私もいろいろどこかで発表する機会がないかなと思っていて、ハワイアンセンターが復活するからそこでとか、いろいろ聞いてまわったことがありましたけど、結局ちょっとできなかったんですけれども、その中で子どもたちは、今でも大勢の人前でやりますけど、当時から文化センターでやったりするときに、練習では全然できなくても、文化センターでやるとなぜかできちゃう。それをみんなで結束して、ここはこうだよとか。それぞれできることをみんなにね、教えてくれていたので、そういう意味では序章の中でも出てきましたけど、例えばもう避難してそれがマイナスだったとしても、その中に全部基準を作り上げていってくれた。すごいな、というふうに感じております。

最後に一つだけ、一般の市民としてということですので、私は31年続けてやっておりましたけれども、その中の1年2年できなかったし、この本の中にも出ている年のことでした。私もちょっと当時の復興関係とか、伝承の実行とか、ちょっと携わっておりましたし、それから女性たちを今後どうしていこうかとか、実証実験のプロジェクトとかにも入っておりまして、すごく忙しくて、もう本当に好きなマラソン練習も全然やらずに、それから飲み会は一切禁止でやってないから。その中でまた復活して太鼓をやろうと根内先生に言っていただいたときには、何かやっぱり自分にもちょっと希望があって、子どもたちに触れるとすごく子どもたちのみならず、自分にエネルギーがもらえるので、市民として大変貴重な経験をさせていただきました。 ありがとうございました。

（根内喜代重氏）　本当に忙しかったようですが、何とか頼み込んで復活させてよかったです。今の都路になくてはならないものになっていますので。ありがとうございます。

今日は当時の先生方にもお越しいただいているんですよ。全員からというわけにもいかないんですが、実は先ほどお話した「みや古旅館」に炉端がありまして、そこで当時の教頭先生と板さん（店主）とお酒を飲んでいたときに、「学校、地域がこんなにを感じたことはありませんでした」って話してくれたんです。その時の思いなど、今日はちょっとお酒がないのですが、内々でお話いただけますか。

（関口和夫氏）　教頭の関口と申します。私は本当にその場面を覚えておりまして、その日は委員会があって、泊まる予定でやるか、泊まる予定でこなせちゃうんだったらと飲み始めて、その当時、避難している時から戻ってくるまでの、いろいろ思い出話をさせていただきながら、そういった言葉が出たんで、私もそんなこと言ったのかなというふうに思うことがあるんで。

どういう状況かとお話しすると、私が震災の時の 8 月の人事で、震災当時の 1 年目の 8 月、教頭として、赴任しましたのでそこはもう石森の小学校で、岩井沢と古道がいっしょに学校をやられている中でしたので、先生方も本当にいろいろご苦労されて、校長先生たちも一生懸命やってくださって、少しずつ学校が進んでいるっていう状況でした。

保護者の皆様もいろいろ大変な思いを抱えながら、子どもたちをバックアップしていただいていたので、1 年経ち 2 年経ち、進んでいく中で学校の取り組みっていうのは、安全安心を伴いながら、やっぱり子どもたちに良い教育をということで進んでいるなと思いつつ、進んできました。

そこに 2 年 8 か月いたのですが、やっていく中で、なんかちょっと、教育はすごく充実しているなと思いつつも、ちょっとふわふわしてるというのでしょうかね。これって何なのかなあと思っていたのですけど、ただ、そんなことやっているうちに、今度は戻るっていう時期になってしまいまして、引っ越しの準備とか、帰還に向けての準備が入ってきたので、そこをちょっと忘れていたんです。

4 月に戻って再開する中で、まず保護者の皆さんと、これから学校整備だとか、学校どうしていくのかっていう話をしていく中で、すごく心強いお話をいただいて勇気付けられたっていう気がしました。

また、地域の人たちも、先ほどの写真にもありますように、いろんな活動していく中で、すごくバックアップしていただきました。根内先生がいろいろこう、うちの職員がこんなことやりたいだなんて、地域の人たちに投げかけて、いろんなことを提案していただいて、やりたいことがどんどん現実的になっていって、形作られていくのを見て、本当に地域の皆様の力がすごいなと思いつつ、感じていたんですよ。

そんなものがあったときに、不安っていうのは、そういった地域や保護者の人たちの目に見えないバックアップだとか、支えっていうものが、そのときはあまり感じられなかったりと、語弊はありますけども、そういったものが、こうやっていただけるってことは、学校にとってもすごく支えとなり職員の支えとなり、心の支援になったっていうことをすごく感じたんですね。

やっぱり地域だったのかとか、地域とともに生きる学校とか、言ってはいるんですけども、あらためてそういうふうに地域の良さっていうのを、ありがたさっていうんでしょうかね、すごく感じたのが正直なところです。そういう普通の生活をしていく中で、 ふだんは多分、地域の皆さんのありがたさと保護者の皆様に対し、ありがとうって感じてはいるんでしょうけども、そこをあらためて実感したなあっていう

のはその時だったので、そんな言葉が出たのかなというふうに思っています。
ちょっと言葉の表現とか、語弊があるかもしれないのですけども、そんな思いで、話したかなっていうのを思い出しました。酔っぱらってのその言葉かもしれませんが。

（根内喜代重氏） 先ほど、「もうひとつの教室」というお話をさせていただいたんですが、そこをよく利用していた先生も今日来ていらっしゃいます、横田先生がいらっしゃると思うんですけど。横田先生は、被災地、葛尾中学校の校長も務められています。ちょっとそこら辺についてお話いただきましょう。

（横田和典氏） 当時は深い考えはなくてですね、今、根内先生がおっしゃったように、すごく地域があったかいので、「よりあい処 華」さんが学校の下にあるんですけど、 そこにふらっと遊びに行くとすごくいい感じで、子どもたちが 「先生、そこで勉強したいよ」っていうから、じゃあ行ってみようかって感じで行ってみたら、昔作りで、囲炉裏があって、畳敷きで天井が高くていろんな作品が飾ってあって、いい雰囲気なんですよね。ちょうど 3、4 年生と地域のことについての学習だったので、いろいろ教えてもらうのもよかったんですけど、「みやこちゃん」っていう都路のキャラクターを作ってみるっていうことで、そこに行ったらもう本当に子ども 2 人におばあちゃんが 1 人付くみたいな手厚い指導で、3 年生だから針と糸なんて使ったことないんですけど、ひとつひとつ教えてもらいながら「そこ、もっと『おっちめで』、先生『おっちめで』ってなあに？」みたいな感じで、人とのふれあいで地域の良さがわかってくるものなので、 そうやっておばあちゃんと一緒に作ることで、素敵だな、やっぱり都路っていいなっていうふうに感じてもらえるかなと思って楽しみながら通いました。

偶然というか運命というか、校長になって初めて都路町の隣の葛尾村に、葛尾中学校、生徒 6 人ということで、やっぱり小さい学校で先生とマンツーマンぐらいで、私が行った時の 1 年生は、小学校 6 年間ずっと 1 人で。 中学 2 年生になって初めて同級生ができて、人生初の同級生だよ先生、みたいな感じで、そういう学校だったんですけど、先生の教えを素直に受け取る良い子だったんです。
自分からこれをしたいってなかなか言えなくて、何とかしたいなと思って。例えば、校長として人数が少ないから、教育課程を作るときに、ちょっと子どもらと懇談して、何をやりたいか尋ねて、もっと部活をいっぱいやりたいんですよ、なんて、いろいろ話し合いをしながら、もっと地域の人と話したいと言われれば、じゃあやろうなんてことで、子どもの願いを実現していくっていうか、やりたいことベースで学びが進んでいったら、子どもはやっぱり、自分からやるようになるんだなっていうのを、当時の古道小の経験から学びまして、葛尾でも、うまくいったかどうかわかりませんけど、活かしてきました、以上です。

（根内喜代重氏） 当時の地域の先生方もたくさんあそこにいらっしゃるんですが、ちょっとお時間もあれなので、 終わってからでも、お話を聞いたことがこちらの方にいろいろ載っておりますので、ぜひ発言いただければなというふうに思います。
それでは、先ほど赤羽先生からもお話がありまして、本当にすごいことだったのですが、NHK の「おはよう日本」の中継も何日か前から入りまして、入学式から校長室に戻ったときには、もう机等が全部廊下に出されていまして、それでカメラがね、報道関係者がもう 20 人以上いらっしゃって、そしてここまでやるのか、っていう思いだったんですが、それを本当に巧みにこうコントロールしていただいて、教育活動に支障がないようにしていただいたのは、当時福島復興局にいらっしゃった宮田さんです。

明日入学式というなかで、赤羽先生がいらっしゃったとき帰り際に、お茶でも飲んで行きませんかと申し上げて、1 時間ぐらいお話いただいたときにご一緒だった宮田さんにも、当時の状況とともに、これまで 12 年、都路が歩んできた姿をどんなふうに感じてらっしゃったのかなっていうあたりを、ちょっとお伺いしたいと思います。

（宮田寛之氏） 経産省の宮田と申します。当時はですね、福島復興局兼原子力災害現地対策本部で田村市を担当しておりまして、いろいろな避難解除調整ですとか、地域の復興ですとか、住民の皆様の帰還支援などをさせていただいていました。ちなみに、一番私が当時尽力したのは都路のファミリーマートのオープンでございまして、本当に末永くよろしくお願いいたします。

根内先生とは避難指示解除の前から多分、何度かお会いしていて、本当にやさしい笑顔が大好きです。
ついつい都路と先生の顔が見たいだけで、 お茶を飲ませていただいたりとかしてたんですけども、そんな中で、本の中にも書いていただいたように小学校の再開の際に、特にマスコミの対応ということで赤羽先生、当時大臣の方針でやらせていただきました。

たしか、赤羽さんに「お前が行け」と指名されたというよりは「私が行きます」って立候補して、任せていただきました、おかげさまでとても良い経験ができたと思っております。
避難指示を解除して、住民の皆様が帰還するのは都路が最初でしたので、本当に日本じゅうが注目をしていて、入学式がテレビカメラだけでなく、記者さんが 20 人以上来ていまして、実は私も経産省で広報の仕事をしていたことがあるんですけど、正直こんなにマスコミの方が来ることはですね、経産省としても、ほとんどないぐらいものすごいマスコミの方が来ておりました。静かな都路にあれだけのマスコミの方が来るっていうのは、本当にかなり特別なことで大変なことでしたが、入学式でかわいらしい 4 人の、もしかしたら今日はその、かわいらしい方がいるかどうかあれですけど、とにかく何とも幸せな空気が生まれた式でした。

ただ、そこに大勢の記者さんが来て、今日のように、行儀のいいマスコミの方ばっかりだと助かりますけども、当日はより過熱していて、もう入学生の顔の間近で、こう撮影したりするようなですね、ちょっと大変な感じになっていましてですね、まずは規制線を貼るっていう、取材をしてくださいっていう位置を決めて、式典中に市長とか、根内さんとかあと住民の方も含めて取材はやめてくださいと。校長の取材を後でまとめてやりますからと。時間を決めてやるとか、そういうのを記者さんに説明してやらせていただきました。

やっぱり一番大変だったのは、校長先生の会見が本当に大変な感じで、やはりああいった環境で学校を再開するっていう状況でしたので、本の中にも書いてありますけど、必ずしも歓迎だけではなくて、こういう中で本当に再開して大丈夫なのですかみたいな。 結構もう本当に我々が取材で答えるにしてもすごく覚悟がいるようなですね、質問がやっぱり多かったんですよ。ただそれに対して私も割って入る覚悟で準備していたのですけど。もうその必要がなくてですね、本当に根内先生は、まさに覚悟ですよね、覚悟を決めて、先ほどから出ていますが、地域に子どもが戻るってことが、この地域の本当の復興につながるんだっていう覚悟と信念を持って、堂々と答えられていて、本当に同じ公務員として、すごく偉大な先輩

だなというに当時感じたのを覚えています。すいませんちょっと長くなっています。

都路にも当時担当していましたので、しょっちゅう行っていましたし、とても難しいと思いますけども、何て言うのでしょうかね、その本当に都路っていうのは、やっぱり何かこう、人を引きつける何とも言えない力があってですね、もう本当に大好きですよ。で、しょっちゅう、あんまり最近じゃないですけど、1年に1回ぐらいはですね、ぜひこれからも、何とも言えない都路の魅力を皆さんで守り通していただけるものだと思っています。

やっぱりこういう若い人たちの、成長した姿を見ていると、もう、これからますます良くなっていくのだろうなっていうのを、今日改めて確信いたしました。どうもありがとうございました。

（根内喜代重氏） ここではちょっと紹介できないような質問もいろいろ受けました。本当に今日、たくさんの方に来ていただいて、皆さんからいろんなお話を伺いたいのですが、ちょっと時間になってしまいましたので、ここでパネラーの皆さんにはもうちょっと、うずうずしているのではと思いますので、最後に一言いただくようにしたいというふうに思います。

皆さん方からいろいろこれからの地域のこととか、ここまで聞いた感想でもいいのでお願いします。

（吉田実里氏） はい。ありがとうございます。これからの地域がどうなってほしいかっていうのを、今度は私たちのような若い世代が、伸び伸びと育ててもらったように作っていく必要があるかなとすごく思います。

そのうえで、すごく自分自身も大事にしていきたいなと、今日このトークセッションに参加して思ったことは、しっかりと人のことを頼りながら進んでいくことがすごく大事なのかなと思いました。自分一人だけでは、発揮できる力もできることも限られているとは思うので、しっかりと周りの人を頼りながらそしてみんなで協力して、都路のために明るい未来のために、進んでいきたいなとすごく感じました。ありがとうございました。

（根内喜代重氏） ありがとうございました。関根先生、教職をやめてまでっていう、なんかその辺もちょっと触れながら、お話いただければと思います。

（関根理子氏） 私も人の力を頼ってみようと思います。私は、教職を辞めてでも「キュウリジャム」を復活させたっていうふうに根内先生がおっしゃるんですが、今「キュウリジャム」が復活していてどう思いますか。はい。初代に開発した高橋公大さんです。

（高橋公大さん） そうですね。まさか、こういう形で復活すると思っていなかったんで、こうやって今田村市を離れて仙台で生活しているんですけども、この「都路キュウリマン」の活躍が仙台にいる自分まで届いているので、本当に嬉しい気持ちというか、ちょっと自分たちがやってきたことが、関根先生やいろんな方を通して、こうやって後世に残してくださっていることが、やっぱ何よりも嬉しいし、これを通して、いろんな人を活気づけたいっていうことで始まったので、こうやって、いろんな人に伝わっていることが、本当に感無量です。はい、ありがとうございます。

（関根理子氏） もう一人、来てくださっているので、朝田萌衣さん、お願いします。

（朝田萌衣氏）　私もみんなと一緒で、本当に復活っていうか、続けていってくれることはすごく嬉しいなと思っています。「キュウリジャム」を通して身についた挑戦力だったり、行動力、諦めない力であったり、 あと何よりも、ここまでつながっているこういう友人のきずなっていうのを、「キュウリジャム」を通して感じていることですし、それぞれみんなバラバラで活躍しているんですけど。それをこのトークで感じながら、自分も負けないように頑張らなきゃなとか。

「キュウリジャム」でお世話になった家族であったり、先生方だったり、地域の方々であったり、そういう恩返しではないですけど、これから都路や田村市の力になっていけるような人でありたいなと。これから学び続けていきたいなと思っています。

（関根理子氏）　はい。というように、私の教え子たちは本当にみんなすばらしい子どもたち、都路が育てた子どもたちはこういうふうに育つんですね。

私が仕事を辞めたのは、かなり早期退職だったのですが、これだけすばらしい子どもたちを何代も育てますともう大満足でして、退職ではなく、教員の卒業をしようと思いました。もうこれ以上の子どもたちとはなかなか向き合えないから、自分もここまでがもう精一杯かもっていう気もあって、やりきった笑顔で卒業させていただきました。

教員不足の時期に大変申し訳ないんですが、本当に精一杯やってきて、いい教員生活を送れたなと思ったので、早期退職いたしましたが、その時に、根内先生の本が出版され、ジャムが都路町商工会さんではこれ以上製造も販売もできないっていう話を聞いて、こんなに頑張ってきたのに、ここで途絶えさせるわけにはいかないと、今の 2 人の言葉を聞いてやってよかったって、今、仕事を始めて 1 年になるんですが、加工場を作ってジャムの製造をやるっていう全く異色の世界に入り込んだんですが、やってよかった、間違いじゃなかった。

あの子たちが生きる自信になったり、私たちがやったものがこうして世に出ているっていうことで、これから先の、まだまだ未来ある若者たちですよね。自信を持ってもっと大きく羽ばたいて欲しいな。そのために、私が地域のために、ジャムもできたらなっていう思いで製造しているので、ジャムを作るために教員を辞めたわけではないんです。よくそう言われるんですけど、ただやっぱりこれも、運命といいますか、タイミングとかすごくいろいろなものがパズルのようにはまって、ここまできているので、これからの私の道は、新しい人生をときめきながら今も学びを続けながら、新しい仕事を頑張っていきたいな、そしてこうやって、困ったから来てっていうと、来てくれる教え子たちも含めて、都路ってやっぱりすばらしい土地なんだなっていうのを何度も何度も再確認しています。これからもよろしく。

（根内喜代重氏）　今も都路の未来を考えていただいている、三浦先生お願いいたします。

（三浦悟氏）　はい。今日このセッションで、パネラーの方、それから会場の皆さん、関係者の話を聞いて改めて、私がなぜ 12、3 年と、ここに通い続けている理由を何か聞かせてもらっている気がしました。

私のプロフィールにも書いてあったと思うんですけれども、NPO 法人を運営しております、そういう点からして先ほど、吉田実里さんが人への感謝とかをとても大切にお話されていて、関根先生は楽しいから、一生懸命やったんですと。

そういう人をここまで育てられる都路っていうのを、実感しました。都路はあぶくま地域にあって、豊

かな資源やその地域に支えられて都路のまちを作られていたのか、あるいは田村市を作られたのかと思うんですけれども。地域を作った人、この先どうなっていくんだとかそういう思いもありながら、山づくりから始めたんですけれども、3 年ほど前に NPO 法人化して、集落支援という本当にまちづくりのような仕事に取り組み始めています。

ただ今日、 当時のことをたくさんお聞かせいただいて、 臨場感を持って感じたんですけども、やはり 2011 年の震災があってそれがきっかけになって、これだけのエネルギーというか、人の方に根気、それが生まれてきたんですね。今、日常に戻りつつあって、それはそれで大切なことなんですが、それを乗り越えてどうやって本当に都路でこう、人を育てていくかっていうのは、今までと同じことを追いかけてもできるわけではないっていうふうな思いもあります。

そうしたときに、一体何ができるんだろうかというのを、先ほどお話したときに、毎年 1 回読みたい、読んだ方がいい本だっていうふうにお話したんですけれども、今回、読み返してみて、その部分をじゃあこれからどうしていくんだということを、根内先生は問いかけ続けているのかなというふうにも思い返しました。

そういう形で、NPO としては、まちづくりを、今日ここに集まった皆さんもですし、これを支える都路の皆さんと本当に一緒に考えていって、 都路が地域とともに学校があり、その学校で先生たちがこうして子どもを育て、その子どもにまた大人が育てられる、地域の人が育てられるっていうそういうまちづくりができないかなと考え、実は私どもの NPO、この 4 月に福島イノベーションコースト構想の復興事業という、人材育成の大きな事業があります。これを宇都宮大学の先生、林業の先生なんですけども。

林業人材育成ということで、今年度からやり始めることになりました。私たちが現地の拠点を支援します。これは林業人材なんですけども、実はその先生は、山を管理し、林業するっていうのは、地域をデザインするということじゃない。これだけの山間地の山あいに農地があり、その農地の一角に集落がある、そういうところでまちづくりをすることを、ぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思いますし、この本もそうなんですけども、私自身はスイッチが入ったので、ぜひこれからも都路で活動していきたいなと思っています。

（根内喜代重氏） ありがとうございました。地域で子どもが育つというような観点で本を出されていますが、知本先生、よろしくお願いいたします。

（知本康悟氏） はい。地方にとって大事なことっていうのは、魅力と可能性と安心だと思うんです。

その安心の部分は今日、根内先生が実践を通してお話してくださいました。魅力とか可能性っていうことで言うと、例えば私は、田舎が佐渡なんですね。佐渡はジオパーク、世界農業遺産、そして今度、世界遺産登録を受けて、三層構造になっておりまして、その事業の大地の上に生き物と人々の暮らしがあって、そのうえで、歴史と文化が営まれる、そういう考え方です。それを「佐渡学」と言っています。佐渡を学ぶっていうことなんですけれども。

ぜひ田村市でも、「田村学」を構想していただきたいなと思いました。書いていただける方はもう、この辺に皆さんずっといらっしゃいますので、地元の方が書いて、大学の先生とか専門家が監修するという

か、そういう形がいいと思うんですけれども、やっぱ共通の武器が絶対必要なわけですから、それは大事なことだと思います。

私の場合、「佐渡学」の本も作ろうよって言ってもなかなか動いてくれなくて、今、市長さんがいらっしゃいますし、教育長さんもいらっしゃいますので、ぜひご検討ください。それからもう一つ、今日資料を 1 枚お配りしたので裏の方をちょっと見ていただきたいんですけれども。今日これを印刷して持ってきてよかったなと思いました。なぜかっていうと先ほど教え子の皆さんがまさにその姿、私がイメージしていた姿なんですよ。ちょっと読んでいいですか、最後。これで終わりにします。上からずっと読んでみたいと思います。

「ふるさとのあるかしこさ」（東井義雄『村を育てる学力』1957 年）という言葉がある。

ふるさとを学び、 ふるさとを愛し、 ふるさとの未来を考えようとするかしこさを持った子どもは、どこ行っても、どこで生きても、その土地を愛し、その土地をよりよく生きる場所にしようと考える子どもになるだろう。

ふるさとを愛する子どもたちが、すべてふるさとに帰ってくるわけではない。当たり前のことだ。人には、それぞれの人生がある。そして、それぞれの決断の重さに変わりはない。

そのうちのいくらがふるさとにもどり、これからのふるさとをつくりだす力になっていくだろう。そして、それを、ふるさとを後にした「ふるさとのあるかしこさ」をもった子どもたちが、日本と世界のさまざまな場所からさまざまな仕方でつながり支えていくだろう。出たり入ったり、無理なく、自由に、自分の歩み方で。それは、楽しいことだ。

そこで生まれたから、そこがふるさとなのではない。ある思いを持ってそこを見つめ、選び直したとき、はじめてそこがふるさとになる。そこを離れ、他所で生きることを選んだ者も、そうである。これまで、みんなそうしてきた。それぞれがそれぞれの身のうちに、期待と不安と悲哀を持ちながら。

大切なことは、「ふるさとのあるかしこさ」をもって、さまざまな場所で生き始めた子どもたちが、島、この場合は村でしょうかね、村の内と外で、開き合い響き合いつながっていくことである。

「生きる力」とは、そんなことではないのか。そんな子どもたちに島の希望が、田村の希望があると。

私もそんな「ふるさとのあるかしこさ」を持ちたいって思います。以上です。

（根内喜代重氏） ありがとうございます、最後に水谷先生、よろしくお願いします。

（水谷大氏） はい、根内先生の著書の中で、当時の教育長の言葉に「子どもたちは学ぶことで安定する」という表現がありました。

それを実証するかのように、プリントを何枚も貪りつくように学習していた人がそのお子さんですよね、おそらくは。私がかつて教えた子どもたちも、同じようなことが言えたかなと思うと、決して同じではなかったような気がします。

というのは、住んでいる地域によって抱えている問題も少しずつ違ってくるんですね。例えば、津波以外ですと PTSD（心的外傷後ストレス障害）っていう問題がございます。

津波でなくても、普通の地震じゃなくても PTSD って起こりますよね。阪神淡路、そして新潟沖の後、これがかなり研究されて、数日から 5 年以内に発症する確率が非常に高い。言われていた中での東日本

大震災。それはどうやって大人も子どもも PTSD を乗り越えていくのかという問題もありました。

いろんな大学の先生方とお話してたどり着いた結論が、PTSD の原因っていうものは、基本的には見えないものなので、目に見えない恐怖心、つまり何だかよくわからない。それが一番人間の恐怖心を煽るということ、例えばお化け。見えない、誰も見たことがない、姿のないものに怯える。

それが事実で、そこをどうやって消し去るのかっていう方法が一つしかないんだと。目に見えない怯えに対するものの上に、しっかりした現実、事実を上書きすることだっていうふうに聞きました。

今ここに福島テレビさんのカメラがあります。これはデジタルですよね。でもデジタルでも、上書きすれば、元のデータは見ることができませんよね。ハードディスクに書かれた記憶に新しいデータを上書きしちゃうと元のデータは、厳密に言えば復元できるんですけども、見えません。それが PTSD から PTG につなぐと学びました。

PTG とはポストトラウマティック・グロス（心的外傷後成長）。つまり PTSD を乗り越えた上にある成長ですっていうところに持っていくために、どうするかっていうことで、子どもたちに地域を取材させました。そして、それを、こんなふうに撮影して編集して、グループごとに一本一本映画を作る作業をさせました。最終的に子どもたちは何を言い出したかっていうと、この町には何にも残ってない。取材をしてわかったと。でもたった一つだけ残ったものがある。それを「何もないけど、何でもある」っていうタイトルにしたみたいです。

何でもあるって、何があるのって聞いたら、ああいう大人が残ったじゃん、って子どもたちは言うんです。つまり、震災からの復興で、汗だくになっていた自分の家の父ちゃん、母ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんの姿をずっと子どもたちが見て育ってきたんです。その姿を見たときに子どもたちは、復興が進もうが進まないが、堤防の高さが 6 メートルも 7 メートルも嵩上げされようが、その大人たちの姿を見て、すでに子どもたちは、格好いい大人たちが、僕たちの町に残っている。それが僕たちの一番大事な財産だって言ったんですね。

セッションの冒頭に戻りますけども、市長さんが私の夢っていうことで、レッドカーペットを踏ませてあげたいなって言いました。賛成です。それはこういう、さっきの高橋君とかいろんなお子さんが発表してくれましたけど、皆さんにとってのかっこいい大人っていうのは、根内先生も関根先生もちろんそうですけど、他にもたくさんいらっしゃったと思うんですね。

群像的にたくさんいらっしゃって、そんな中で育ってきたと思うので、田村市の中にいる、かっこいい人、その時立ち上がって、汗をかいた人たちの姿を群像劇的に、描いていけたら素敵だなってそれこそ、こういった本をさらにみんなに知ってもらうきっかけになるかなって思うんですね、映画の楽しみっていうのは、ただ見るだけではなくて、私事、陸上競技協会の会長もやっていますけども、陸上競技を見る楽しみもある、するっていう楽しみもある、それから陸上競技って何だって知るっていう楽しみもある、それから競技をしている自分の子どもたちや親戚やお兄ちゃんやお姉ちゃんを支えるという楽しみがあって、支えるっていうことも楽しい。

だから「観る」「知る」「支える」っていう楽しみは映画製作にも共通していて、観るだけが映画の楽しみではない。映画の内容を知るっていうことも、それから支えるっていうことも、最も楽しいのは、映画

作りをするっていうことです。それが一番楽しいです。そういうところに、皆さんと一緒に関わっていけたら嬉しいなと思います。

（根内喜代重氏）　ファシリテートがうまくできなくてちょっと時間が押してしまいまして申し訳ありません。

会場内の方からも本当にいろんなお話お伺いしたかったんですが、時間ですのでこれでトークの方は、終わりにしたいというふうに思います。

最後ファシリテーターでまとめをやれとは言われていたんですが、時間の整理もしまして、あと今、パネラーの皆さん、会場の皆さん、それぞれの方がいろいろ感じたこと、そして何か残ったものをお話しおてくださいました、それをもって「まとめ」とさせていただきたいというふうに思います。

ただ一つだけ昨日、本当にこのことについていろいろ当初からお世話になりました、福島大学の名誉教授である境野健兒先生という方がいらっしゃるんです。実は今日はその方にファシリテーターをやっていただく予定だったんですが、 体調を崩されまして、昨日、電話でお話しながら、まとめるために、教育実践の意義とか価値は何かなっていろいろ悩んでいますみたいな話をしたら、即答されました。

メモしていますのでお話します。こんなふうに言われました。

「先生、何を言っているんですか、避難の中で待ち望んでいた学校再開、地域とともにある学校づくりしかないでしょ。それが真実の道筋です。古道はそこにちゃんと向き合ってきたんですよ。優れた試みですよ。」と。

地域とともにある学校づくり、何度もこれまで確認したことなんですが、私の中でも、すとんと落ち、それがこのお話のように、都路には地域とともにある学校づくりは、今も確かに続いているんです。

そのことを、何か本当に、先ほど宮田さんもおっしゃっていましたが、何となく来たくなる、その人、そういうものがあるかなというふうに思っています。本当に今日のトークセッションそして企画展が、皆さんお一人お一人の中でまたそれぞれの地域で、なんらかの学校づくり、地域づくりにつながっていってくれたらなというふうに思います。

最後になりますけども、 本当にこの企画のためにいろいろご協力いただきまして本当に、 田村市の市長、副市長、職員の皆様、そして今日、スタッフまでやっていただいた当時の先生方、子どもたち、いろんな地域の方、本当にありがとうございました。

お忙しい中おいでいただきまして、また今後ともどうぞお力添えをよろしくお願い申し上げまして、ファシリテーターの役目を終えたいと思います。本当にご協力いただきましてありがとうございました。

（渡邉賢一副市長）　どうもありがとうございました。まだお話尽きないところですけども、だいぶ時間も超過しましたのでこれで閉じたいと思います。

「未来をつくる中学生」を中心とした展示の方は、エントランスで展示がありますので、時間の許す限りご覧いただきたいと思います。キュウリジャムの販売も行っております。アンケートにもご協力をお願いいたします、それではトークセッションを終わりたいと思います。

いま一度大きな拍手をお願いします。